

共に創る図書館

～館長対談シリーズ⑨～

大高薬学部長との対談

吉本 本日は、薬学部長の大高先生からお話をお伺いします。よろしくお願いいたします。図書館についての印象はいかがでしょう。

大高 先ほど館内を案内していただいて、新しい色々な取組みをされていることにびっくりしました。このようなものがどんどん利用されるようになると学習環境というのは非常に良くなると思いますね。私も時間ができたら足を運んで、ぜひ使ってみたいと思います。

吉本 大高先生のバックグラウンドをお伺いします。先生は大阪生まれで京都大学薬学部ご出身とのことですが、薬学部へ進まれたきっかけはどのようなことでしょうか。



幼い頃は調剤室が遊び場でした

大高 私の両親が薬剤師で薬局を経営しており、幼い頃は調剤室が私の遊び場で、重曹を水に入れて泡が出てくる様子を見て遊んだりしていましたので、幼い頃から科学というものに興味を持っていました。また、私の出身の天王寺高校から京都大学への進学者が多かったので、自然に京都大学の薬学部へ進みました。

本との関わりについては、両親が忙しかったので、わりと本を与えられていました。小学校の2年か3年生の時に何冊かの百科事典を買ってくれ、他にも項目ごとの事典や、毎月送られてくる地理や歴史に関する雑誌も買ってくれていたのでもいつもそれを読んでいました。社会や理科は勉強しなくても、既に頭の中に入っているという良い環境だったと思います。そういうのも影響してか今でも本はすごく好きです。

吉本 学生時代には図書館はよく利用されたでしょうか。

大高 学生時代は図書館を「勉強する場」としてよく使っていました。大学院の入試の時には、京都大学の医学部の図書館の自習室が広がったので、みんなでそこへ籠って勉強していました。大学院へ入ってからは新着雑誌が届くと、それを見に行くのが楽しみでした。

NC I (National Cancer Institute) への留学

吉本 ペプチド関係を専門とされていますが、大学院の頃から専門とされていたのでしょうか。

大高 ずっとペプチドタンパク質に関する有機化学を専門にしています。京都大学の大学院を修了後、助手になって、その時にアメリカのNIH(National Institutes of Health)にあるNC I (National Cancer Institute) に1年間行っていました。帰国してその後助教授になり、しばらくして徳島大学へ赴任させていただきました。NC Iでは最初は違う分野の研究をする予定だったのですが、行った時に、「抗がん作用を持つようなたんぱく性の化合物が作れるか」と聞かれ、あっさりと合成できてしまい、基本的なベースは同じ領域に巻き込まれてしまったという感じでした。

吉本 NIHの図書館はどのような感じでしょうか。

大高 NIHには大きな図書館がありましたね。しかし必要な雑誌はラボで購読していましたので、大体そこで事足りていました。

薬学部スタジオプラザは充実した良い学習環境です

吉本 薬学部の状況についてお伺いします。学習環境はいかがでしょう。

大高 薬学部 1 階にスタジオプラザというかなり広い場所があり、学生は試験前やレポートを書く時期にみんなそこでよく勉強しており、充実した良いスペースだと思います。

吉本 医学部や歯学部でも自習室がかなり充実してきましたが、結構図書館へ来て自習している学生も多く、やはり学部の自習室がまだ不足している状態ではないかと思います。しかし、薬学部学生の図書館利用は、他の学部と比べるとやや少なく、薬学部の自習室が充実していることも原因しているのではないかと思います。

大高 その他にも、国家試験の前になりますと学生から講義室を 1~2 時間使いたいという申請が出てきますが、自分たちできちんと管理できるのであればという条件で許可していますので、そういうこともあるのかなと思います。しかし本日図書館を案内していただいて、図書館で自習する方が良いのではないかとも思いました。



薬学部長 大高 章

薬学部の研究環境

吉本 研究環境についてはいかがでしょう。徳島大学の中でも薬学部は熱心に研究に取り組んでいるという評価があります。

大高 薬学部の研究環境という意味ではそんなに悪くはないと思います。研究する学生も真面目で、色々なことに熱心に取り組んでくれます。

地域連携・社会貢献、他大学との連携

吉本 地域連携や社会貢献についてはいかがでしょう。

大高 薬というのは、一般の方にとってはなかなかすぐに入っていけるものではないのですが、毎年開催している薬用植物園の一般開放では、皆さん非常に興味を持ってくださいます。また、蔵本祭の時には、最近社会問題になっている脱法ハーブや危険な薬などについて、啓発する取組みをやらせていただいております。また、県の方から数名の学生が薬物乱用防止の学生委員として委嘱され、啓蒙活動に参加するというのもやらせていただいております。

吉本 四国の薬学部で連携されているそうですがどのようなものでしょうか。

大高 主に教育プログラムの開発等です。薬学部が 6 年制になった時に、教員の教育の duty が非常に増えましたが教員数は全く増えませんでしたので、分野によっては教育する人員が足りないということがあります。そこで、4 大学（徳島大学、徳島文理大学徳島校、香川校、松山大学）で融通しながら、各大学の得意な部分を活かして講義配信を行っています。

薬剤師国家試験の受験資格変更による影響

吉本 薬学部では数年後に入学試験が変更になるそうですね。

大高 現在は薬学部一括募集で入学者選抜を行っていますが、平成 30 年度から薬学科と創製薬科学科の学科別募集に変更します。これは薬剤師免許の変更によるもので、今は経過措置が取られていますが、平成 30 年度以降の入学者からは 6 年制と 4 年制との性質が非常に大きく変わり、4 年制の方では薬剤師国家試験の受験資格を得ることができなくなります。



附属図書館長 吉本 勝彦

アクティブラーニング

吉本 薬学部ではアクティブラーニングについて、特徴のある取り組みは何か行われていますか。

大高 文科省の概算事業の一環として薬学部では、薬をみんなで作ってみましょうというものがあります。最初にテーマとなる疾患を出し、グループ分けをして仮想の医薬品企業を作り、どのような薬が作れるのか、何をターゲットにしたらよいか、どれだけの市場規模があるのか、どれだけ儲かるのか、というような仮想の製薬企業演習のようなものを行っています。最後の評価はチームの発表会に教員や院生が見に来て、どの企業に投資しますか、どの企業が儲かると思いますか、という投票を行います。一種のゲームですがすごく面白いと思いますし、それなりに成果が上がっています。これは必修ではなく選択授業の一つですが、色々と自分たちで調べに行く中で、様々なことを自分たちで学習していきますので、アクティブラーニングという意味ではこのような授業をこれからも積極的にやりたいと考えています。



論理的な英語が書けたら 絶対それは日本語に反映します

吉本 レポートの書き方や、論理的な文章を書く方法等のアカデミックライティングの教育について、全国的に取り組む大学が増えてきましたが、薬学部では、アカデミックライティング、テクニカルライティングについてどのようにお考えでしょうか。

大高 論文等については、基本的には個々の分野で指導していますが、その他に薬学部では、概算事業の中の一つのプログラムとしてネイティブの方に何回か来ていただき、主に大学院生を対象に学会発表を目的としたスピーキング指導を始めており、その先生の前で喋ってみて色々な批評を頂いています。しかし書く方の指導となるとなかなかですね。

英語で書くということは、私たち日本人にとっては先ず論理構成がしっかりしていないと、しっかりした論文が書けません。まず論理の構築を頭の中でしっかりとするという訓練をすることが大切です。それと論理的な英語が書けたら絶対それは日本語に反映するんですよ。だから英語がちゃんと書ける人は日本語もちゃんと書けます。日本語がちゃんと書けない人は英語でも絶対書けないですから。これは相互に作用するから最初の頃だけでもいいからしっかりと教えてくれるというのはすごく大事なことだと思います。

吉本 このような指導は一回したら良いというものではなく、継続的に適宜添削等をしてあげられたらいいのですが、教員も忙しくてなかなかそこまで手が回らないし、普通のレポートでもなかなか直せない状況ですね。できれば専任の人がいて定期的にやってくれたらいいのですが、今は人件費抑制の問題もあってなかなか難しいですね。大学院の講義にはありますが、学部学生のうちからきちんと書けるようになる取り組みが徳島大学の中にあっただ方がいいと思いますね。読む力も昔に比べたら落ちている、という意見もあります。

大高 学会発表の論文要旨ですと短いので、ああいうのでもしっかりと添削すると良くなります。

電子ジャーナル

吉本 蔵本分館では今年から電子書籍を増やしてはいますが、どのようにお考えでしょうか。

大高 ベーシックな Chemical の分野では結構電子書籍がありますが、私はやはり紙の方が好きですね。書き込める方が良いと思います。私は電子ジャーナルよりも冊子体を読む方が好きですし、辞書なども研究室で学生はすぐネットとかで引いていますが、紙の辞書の方がその周りに色々な情報がありますので、紙の辞書をなるべく引くように指導しています。

吉本 電子ジャーナルについては各部局の意見が異なり、共通的な見解となると判断が難しいので、ある意味、

執行部で決めていただくようにならざるを得ません。またこれから大学がどういう方向へ力を入れたらよいのかということもあります。電子ジャーナルのことについていかがお考えでしょうか。

大高 欧米の出版社の横暴だと思えますし、アメリカの大学などではそういう所へは投稿しないという動きもあります。私は薬学会に所属していますが、薬学会では自身の欧文誌を持っており、私たちが大学院生の頃は研究室から出す論文はほとんど薬学会の欧文誌に出していましたが、読む人はちゃんと読んでくれています。どうしても impact factor の関係で海外の雑誌に投稿しがちですが、そういう所に戻ってということが、ある意味必要ではないかと思えます。

図書館への要望

吉本 図書館では平成25年度に図書館改革について検討した結果、平成26年度から学習支援を中心とした参加型図書館を目指し、教員や学生と一緒に色々な取り組みを行ってきましたが、薬学部として何かこのようなことに関して要望等がありますか。

大高 PubMed 等の文献検索指導に関しては研究室の方で行っています。学生も忙しくて追い回されている状況ですし、専門に入ってから電子ジャーナルが普及していることもあって図書館へ来る機会が減っています。今日も図書館を案内していただき、たくさんの取り組みをされていることをほとんど初めて知りましたが、図書館で取り組まれていることを1枚もののポスターとかにして貼っていただくと、図書館でこういうことができるということを知っていただけたらと思います。メールなどの場合、情報が過多になるとその情報を見過ごしてしまうことがありますが、目にパッと飛び込んでくる情報というのは大きいと思います。

吉本 私たちも広報に努めているつもりですが、実際にはなかなか難しいですね。

大高 先ほど案内していただいて色々利用してみたいと感じたものがありますし、また、色々な大学を判断する時にその大学の図書館を見てみるとか、生協の書籍売り場に本がどれだけ並んでいるかということを見てみることで、ある意味その大学の知的レベルが分かるという話があります。やはり図書館からの色々な発信ということをしていただいて、昔からヨーロッパなどで言われています「知の拠点」というのになってくれるよう、みんながそう認識するようになっていただくことが大事だと思います。

吉本 授業紹介ビデオなども、受験生が徳島大学について検索した時に、偶然そのビデオを見つけることもあると思います。このように入学前に授業内容を把握して進路決定の参考にしてもらうのも入試戦略の一つとしてもちょうどいいかなと思います。

大高 地域の方に知識の提供をするということも必要ですし、一般の方は大学の図書館は入ってはいけないのかと思っていらっしゃる場合もありますし、地元新聞などへの掲載依頼など、広報活動を積極的に行った方がよいと思います。気楽に入れる図書館というのが大事なかなと思います。昔は電子ジャーナルが無い頃は、教員も必ず図書館へ寄っていました。最近では図書館に自習スペースが非常にたくさんあるので、学生は気楽に入って来られるのかなと思います。

吉本 授業の合間や実験などで疲れた時に「ちょっと図書館に寄ってみようかな、何かイベントやっているかな」という感じで寄れるような、そんな図書館が理想だと思います。昔は研究者のための図書館でしたが、現在は学生のための図書館になっていますので、今後の課題は教員をどのようにして図書館へ呼び込むかということです。今後ともご協力をよろしくお願い致します。本日はありがとうございました。

